石川県

研究協力校（課程又は障害種）

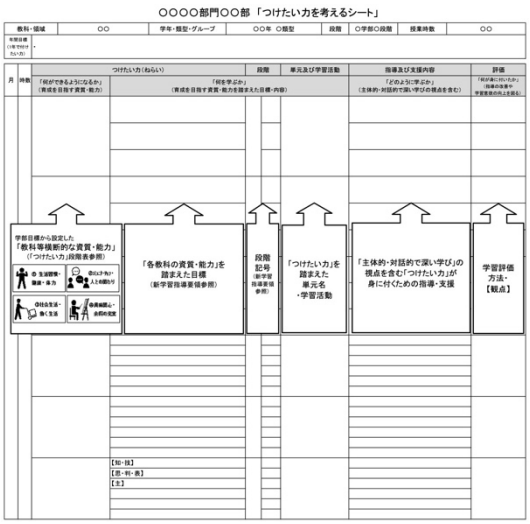
・石川県立明和特別支援学校（知的・肢体）

研究の成果

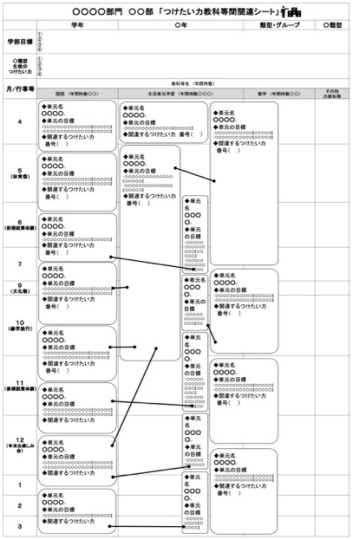
観点１：
各モデル事業内、及び近隣自治体間における概念（用語）の共通理解・合意形成

１．　「つけたい力を考えるシート」「教科等間関連シート」

石川県立明和特別支援学校は、平成 22 年度に知的障害と肢体不自由の障害に対応する、総合特別支援学校として開校した。昨年の平成 29 年度から実践研究を行っており、平成 30 年度は昨年度の成果を踏まえ、「育成を目指す資質・能力」に基づく指導内容と「主体的・対話的で深い学び」の視点による授業改善の検討に取り組んでいる。児童生徒の将来の姿をイメージし、これからの時代に必要とされる資質・能力を「つけたい力」とし、児童生徒の発達段階や実態に応じた「つけたい力」を各教科において明確にした。更に「つけたい力を考えるシート」（資料１）や「教科等間関連シート」（資料２）を活用した教科横断的視点での指導内容の改善等を行っている。



資料１　「つけたい力を考えるシート」



資料２　「教科等間関連シート」

石川県立明和特別支援学校では、平成 14 年度の学校研究で作成していた指導内容表をベースに指導を行っていたが、障害の重い生徒に対する指導内容が不足しているなどの課題がみられた。そのため平成 29 年度から、「つけたい力を考えるシート」を活用し、「育成を目指す資質・能力」から「つけたい力」が身に付く単元の設定を考え、指導内容の改善をはかっている。また、平成 30 年度から新たに教科横断的な視点を取り入れ、国語、数学といった研究対象の教科から他教科や各教科等を合わせた指導等の指導内容を関連付けて、学年や学習グループごとの「つけたい力」がより反映した「教科等間関連シート」を用いた。授業内容の可視化により共通理解につなげている。

観点２：
教育課程・個別の指導計画の実施状況とその評価

2. 「つけたい力段階表」

石川県立明和特別支援学校が考える「つけたい力」とは、学校目標を踏まえ、各学部において掲げた学部目標達成に向けた児童生徒の目指す姿を育むために、一人一人児童生徒に獲得させたい能力である。この「つけたい力」に関して、小学部から高等部まで段階を追って連続するよう、教育課程の類型やグループごとに設定し、「つけたい力段階表」として整理している（資料３）。これを基に「つけたい力を考えるシート」において、単元のまとまりごとに「何ができるようになるか」(育成を目指す資質・能力)を明確にした。

「つけたい力段階表」を用いることにより、児童生徒の発達段階や実態に応じた「つけたい力」を把握することが可能となり、さらに新学習指導要領に基づく「つけたい力」を意識することで、指導内容の改善・精選がはかられた。

「つけたい力」（育成を目指す資質・能力）段階表　　石川県立明和特別支援学校

つけたい力（育成を目指す資質・能力）		小　学　部	中　学　部	高　等　部
①生活習慣・健康・体力	学部目標	基本的生活習慣を身に付け、健康な心と体をつくる	基本的生活習慣の確立と運動を通して、健康な心と体をつくる	社会生活に必要な生活習慣を身に付け、運動習慣を通して、健康な心と体をつくる
	産業技術			自ら規則正しい生活習慣を心掛け、適切な方法で体力の向上を目指し、健康を維持しようとする
	A類型	日常生活に必要な身辺処理等に関する知識や技能を身に付ける	日常生活に対する関心を高め、心身の健康の保持増進にすすんで取り組む	規則正しい生活習慣を心掛け、適切な方法で体力や健康を維持しようとする
	B類型Ⅱ	身近な生活に必要な身辺処理に関する基礎的な知識や技能を身に付ける	日常生活に必要な知識や技能を身に付け、自ら心身の健康に必要な事柄をしようとする	規則正しい生活習慣を知り、適切な方法で体力や健康を維持しようとする
	B類型Ⅰ			
	C類型	簡単な身辺処理に関する初歩的な知識や技能を身に付ける	身近な生活に必要な知識や技能を身に付け、心身の健康に必要な事柄をしようとする	正しい生活習慣を知り、適切な方法で健康を維持しようとする
②コミュニケーション・人との関わり	学部目標	自分の要求や思いを伝え、周りの人と関わりながら、友達を意識して集団活動に参加する	コミュニケーション手段を習得し、主体的に集団活動に参加する	コミュニケーション能力を高め、社会参加及び社会自立を目指す
	産業技術			適切な言葉遣いや態度を身に付け、社会生活における人との関わりの中で、自分の思いや考えを的確に伝え合う
	A類型	身近な人と自分の要求や思いを伝え合い、集団活動に参加する	日常生活や社会生活における人との関わりの中で、自分の思いや考えを的確に伝え合う	状況に応じた言葉遣いや態度を身に付け、社会生活における人との関わりの中で、自分の思いや考えを的確に伝え合う
	B類型Ⅱ	身近な人を知り、自分の要求や思いを伝え、集団活動に参加する	日常生活や社会生活における人との関わりの中で、自分の思いや考えを伝え合う	状況に応じた言葉遣いや態度を知り、社会生活における人との関わりの中で、自分の思いや考えを伝え合う
	B類型Ⅰ	身の回りの人に気付き、簡単な意思表示などをして集団活動に参加しようとする	身近な人との関わりの中で、自分の思いを伝え合う	状況に応じた言動を知り、社会生活における人との関わりの中で、自分の思いを伝え合う
	C類型			
③社会生活・働く生活	学部目標	学校生活に必要な知識・技能・態度を身に付ける	働くことに関心をもち、社会生活に必要な知識・技能・態度を身に付ける	勤労意欲を高め、働く生活及び社会生活に必要な知識・技能・態度を身に付ける
	産業技術			自分の適性を知り、それを生かした就労について考え、社会の一員として貢献する
	A類型	学校生活の予定やきまりがわかり、見通しをもって自分から行動する	自分の役割を理解し、様々な課題の解決に向けて、自ら考え行動する。	自分の適性を知り、それを生かした就労について考え、社会の一員として貢献しようとする
	B類型Ⅱ	学校生活の予定がわかり、簡単な見通しをもって行動する	自分の役割を理解し、様々な課題の解決に向けて、考え行動する。	自分に合った就労について考え、働くためのルールやマナーを守り、地域社会の中で生き生きと活動する
	B類型Ⅰ	学校生活の簡単な予定に気付き、行動しようとする	自分の役割がわかり、様々な課題の解決に向けて、考え行動しようとする。	働くためのルールやマナーを知り、地域社会の中で生き生きと活動する
	C類型			
④興味関心・余暇の充実	学部目標	様々な事柄に興味・関心をもち、生き生きと活動に取り組む	様々な事柄から興味・関心を広げ、意欲的に活動に取り組む	様々な事柄から興味・関心を広げ余暇の充実につなげる
	産業技術			興味・関心を広げ、必要な情報を読み取って活用し、生活や余暇を充実させていく
	A類型	いろいろな遊びや活動に興味・関心をもち、自分から取り組む	自分の興味・関心に基づいて情報を適切に取捨選択し、自ら活動に取り組む。	自分の興味・関心に基づいて、必要な情報を読み取って活用し、生活や余暇を充実させていく
	B類型Ⅱ	好きな遊びや活動を選んで、自分から取り組む	自分の興味・関心に基づいて必要な情報を集め、自ら活動に取り組む。	自分の興味・関心に基づいて、どのような方法でできるか必要な情報を読み取って活用し、生活や余暇に生かす
	B類型Ⅰ			
	C類型	好きな遊びや活動に気付き、取り組もうとする	様々な情報に興味・関心をもち活動に取り組もうとする。	自分の興味・関心を知り、様々な情報を活用し、生活や余暇に生かす

資料３　「つけたい力段階表」

観点３：
個のニーズにあわせた指導法、学習環境・支援の工夫

3.　もののなまえやことばをおぼえよう「ぐるぐるカレー」

知的小学部国語科の絵本「ぐるぐるカレー」の実践では、教師と簡単なやりとりをしながらカレー作りごっこをし、絵本に出てくる材料の名前や調理の動きの言葉を学習するという内容の授業を行った（資料４）。絵本のあらすじは、カレーの材料が一つずつ登場し、それを切って鍋に入れてかき混ぜてカレーを作るという流れである。授業では、鍋に見立てたルーレットの装置に材料カードを貼り、それを回転させて材料をかき混ぜ、カレーを作るという活動を行う。ICT 機器を活用したデジタル教材とカードや鍋に見立てたルーレット型のアナログ教材を効果的に使用し、児童が生き生きと取り組む様子を見られた。

資料４　「ぐるぐるカレー」

観点４：
障害のない幼児児童生徒・地域社会との交流及び共同学習の設定

4.　交流及び共同学習

石川県立明和特別支援学校では、近隣の小学校、中学校、高校と学校間交流を行っている。小学部では特別活動内でゲームを通して交流し、中学部では保健体育でサッカーを行い、高等部では総合的な学習時間で文化祭の模擬店を共同で開店したり、パソコンを用いて交流したりと障害のある子どもと障害のない子どもが一緒に学習活動を行った（資料５）。明和特別支援学校の子どもには人と関わる力や社会性の向上、自己肯定感が育ち、相手校の子どもには障害の理解、他者を思いやる心が育まれることが期待できた。

小学部では希望に応じて居住地の小学校との居住地校交流を行っている。交流回数や内容などは子どもの実態や保護者の希望をもとに教員同士が打ち合わせを行い、子ども同士で事前におたよりやクイズによってやりとりし、体育で水中リレーを行ったり、お楽しみ会で一緒にかき氷を作って食べたりといった交流活動を行っている。

資料５　中等部、高等部交流及び共同学習

観点５：
多面的な視点からの学習評価・授業評価・学校評価の実施

5.　外部からの共同研究者による研究や指導内容の改善への評価

知的小学部は茨城大学准教授新井英靖氏、知的中学部と知的高等部は国立特別支援教育総合研究所総括研究員清水潤氏、肢体高等部は日本体育大学教授長沼俊夫氏を年間 2 回ずつ招き、研究や指導内容等への評価を定期的に受けた。

各学部で共同研究者から助言を受け、それを基に授業改善を行った。知的小学部では、児童の「学びに向かう力」が全ての土台であり原動力であることを学部内で共通理解した上で、授業改善を進めたことにより、「主体的・対話的で深い学び」 を実現する授業づくりに迫ることができた。知的中学部では、国語科の授業の展開をグループ全員で一つの「もの」に関するヒントの言葉を考える内容に改善することにより、生徒同士で話し合う機会が増えた。それにより自分の言葉で自分の考えを伝えるようになり、「思考力、判断力、表現力等」を高める授業改善につながった。知的高等部の実践研究授業では、生活上に見られる課題解決、学びの実感を得られる内容を取り上げていると評価された部分もあったが、全ての教科のベースである国語科との関連や各教科のねらいを踏まえどの教科でどの内容を扱うか教育課程の理解が必要との課題も明らかになった。肢体高等部では、「自己内対話」に導くような場面をどう設定していくかを考えながら授業計画を行うようになり、授業評価はまずは教員自身が自己評価できればよいとの助言を受け、その評価項目等を検討し、次年度の課題とした。

観点６：
新学習指導要領に対応した特色ある取組

６．　「未来につながる新たな学び」

明和特別支援学校は、平成 30 年度から新たな全校研究主題「未来につながる新たな学び」のもと、2 年計画で学部ごとに研究テーマを設定し研究を進めている。新学習指導要領の公示にともない、教育課程編成に向けて、知・肢・小学部、知・肢・中学部、知・高等部、肢・高等部の各部と訪問教育、教育相談部及び自立活動部の各部署でそれぞれの研究テーマに沿って、実践研究を重ね、昨年からの実践研究と学校研究と一体化し研究を行っている。

平成 30 年度は、「つけたい力を考えるシート」を活用した「育成を目指す資質・能力」を明確にし、各教科等の指導における指導内容の検討及び授業改善や教科横断的な視点で、教科や各教科等を合わせた指導間の指導内容の関連性について、「主体的・対話的で深い学び」の視点から児童生徒の目指す姿の実現に向けた授業実践ができた。これらを外部からの共同研究者を招集し、助言を受けて授業改善につなげている。